

いわゆる主客未分の境位は、ここでは問わない。主客が分岐し対立している通常の経験的意識に、対象認知の事態が起る場合、その事態へのアプローチの仕方は、言語慣用の規制力によって、強力に限定され、方向づけられるのを常とする。

例えばギリシア語にランタノー (λανθάνω) (古形：レートーΛήθη) という動詞がある。今まで気がつかなかった、というような意味でよく使われる動詞だが、慣れないうちは、その用法がなんとなく不自然に感じられる。意味構造を支えている物の見方が、我々日本人の現在の言語慣用の自然に反するからである。「私はXに気づかずにいた」と、日本人ならごく自然に言うところを、昔のギリシア人は「Xが私から隠れていた」と言う。要するに、Xの隠覆（おんぷく）からXの露現（ろけん）へという存在意識のパターンにおいて、主体の能動的働きに焦点を合わせるか、客体のあり方を強調するか、の違いなのだが、そのいずれに優位を認めるかによって、認識論はもとより、形而上学も真理論も、決定的に異なる色合いを帯びてくるであろうことが、当然、予想される。

「ランタノー」は、何かが隠れている、隠されている、状態を意味する。隠されている、だから、私はそれに気づかない — Verborgenheit「隠覆性」「掩蔽（えんぺい）性」。何かが隠れているとは、それがそれとは別の何かに掩蔽されているということ。「気づき」がそういう形で拒まれ否定されていることである。

だが時として、突然、覆いを取り払われることがある。今まで隠されていたものが、一瞬にして露見する。それを体験する主体の側から言えば、すなわち「気づき」の瞬間である。一体、何が露見するのか。言うまでもない、事柄の真相が、である。

こうしてものが露わになった顕現状態を、ギリシア語でアレーティア (ἀλήθεια) という。哲学の術語としては、勿論、「真理」と訳して然るべきものであるが、実はこの語も、「ランタノー」と同語根であって、「掩隠」をその意味中核とする。それを ἀ-という否定辞で否定する、つまり「掩隠」状態が払拭される、それが「アレーティア」なのである。このギリシア的「真理」概念の内含的意味構造が、後期ハイデgger哲学の思想的地平形成に重大な役割を演じたことは、人の知るところである。

ふと何かに気づき、その意外性が心を撃つ。それをアリストテレスは「驚嘆すること」（ト・タウマゼイン τὸ θαυμάζειν）と呼び、そして、「驚嘆こそ哲学の始まりである」と言う（『形而上学』I）。何故それが哲学の始まりであるのか。「驚

嘆」は、彼によれば、「疑問」に転成することによって、知的に自己展開してゆく性質をもつものだからである。今自分が気づき、自分を驚嘆させたXは、一体、何故そのようなXであるのか（「原因」探求）、また、Xとは本来何であったのか（「本質」追求）という知的好奇心が、哲学者をどこまでも衝き進ませる動力として働く。それが「気づき」としての、哲学の起点である、と彼は言うのだ。

「(Xは) 本来何であったのか、ということ」(ト・ティ・エーン・エイナイ τὸ τί ἦν εἶναι) — これは「本質」という術語がまだ完全に出来上がっていなかった時期に、アリストテレスが作り出した（その故に、いささかぎごちない）表現である。形成途次のこの術語の裏にも、「気づき」がひそんでいる。何であった(ἦν)のか、という存在動詞の過去継続形がそのことを示す。過去といっても、線的時間秩序の過去ではない。始めからそうであったのだという、今はじめて気づかれた事態の過去性が、ここで、非時間的妥当性に転成するのである。非時間的妥当性をもつ存在事態が意識に顕現すること、そういう意味での「気づき」、それがプラトン・アリストテレス的「本質直観」にほかならない。

今はじめて気づいた、気づいてみると、（始めから、あるいは、気づく前から）そうだった、という「気づき」の過去性は、日本語の助動詞「けり」にも構造的に結晶している。普通、「けり」には三つの主要な意味があるといわれている。

(1) 過去、(2) はじめて何かに気づく、(3) 詠嘆。だが、分解的に取り出されたこの三項目は、「気づき」の過去性において有機的に一体化している。「世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人も恋しかりけり」（貫之）。「けり」のこの用法は遠く万葉代に遡る。

三つの要素に分解できるこのような多重の意味構造が助動詞の形で文法的に定着しているという事実それ自体、「気づき」体験が昔の日本人にとっていかに重みをもつものであったかを物語る。

過去性、気づき、詠嘆という三要素を意味構造的に集束する「けり」を媒体として、一つの重要な意味複合体が、独自の美的価値を孕んだ意識事態の一単位として、ここに自己展開しつつあることを我々は認知する。この特異な意味単位・意識事態は、主体性への深い関わりの故に、創造的力動性をもつ。しかもそれは、一つの内的事態として成立しているが故に、無限の現象形態に展開して、一定の言表形式に拘束されることがないのである。「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」（藤原敏行）はその一例。ここで詩人は、「気づき」と、気づかれた事柄の意外性の喚び起す内的衝撃とを、「おどろく」という動詞の意味を通じて直接叙述的に表白している。

「気づく」とは、存在にたいする新しい意味づけの生起である。一瞬の光に照らされて、今まで意識されていなかった存在の一側面が開顕し、それに対応する主体の側に詩が生れる。「気づき」の対象的契機がいかに微細、些細なものであっても、心に沁み入る深い詩的感動につながることもあるのだ。蕉風の俳句にはそれが目立つ。人口に膾炙した「山路来て」「薺花（なずな）さく」「道の辺の木槿（むくげ）」をはじめ、その例は無数。このような、ふとした「気づき」の累積を通じて、存在の深層を探ってゆくのである。

前述のごとくアリストテレスにおいては、「驚嘆」は「疑問」に転じ、原因と本質の対象化的探求に向うものであった。同じく「気づき」の「おどろき」でも、日本詩人の場合、それは彼を新しい知的発見に向って進ませるよりも、むしろ主客を共に合む存在磁場にたいする意識の実存的深化に彼を誘うのである。「気づき」は、ここでは、新しい客観的对象を客観的に発見することではない。むしろそれは、「意味」生成の根源的な場所である下意識領域（唯識のいわゆる「アラヤ識」）に、新しい「意味」結合的事態が生起することである。「気づき」の意外性によって、アラヤ識にひそむ無数の「意味種子」の流動的絡み合いに微妙な変化が起るのだ。「意味」機能磁場としての意識深層におけるこの変化が、次の「気づき」の機会に、新しい「意味」の連鎖連関を、存在体験の現象的現場に喚起し結晶させてゆく。「気づき」は、日本的意識構造にとって、その都度その都度の新しい「意味」連関の創出であり、新しい存在事態の創造であったのである。

古来、日本人はこの種の存在体験に強い関心を抱き、その実現に向って研ぎすまされた美的感受性の冴えを示してきた。日本の精神文化そのものを特徴づける創造的主体性の、それは、決定的に重要な一局面であった。

『思想』(751号), 1987年1月、p.1-4.